

定時制課程における、教育の活性化への取り組み 『ハートフル沼高定時制』をめざして

県立沼田高等学校定時制課程 教頭 岩田 悦夫

1 はじめに

群馬県立沼田高等学校は、明治30年創立の県内でも長い歴史を持つ伝統校である。定時制課程も昭和23年に設置され、67年の歴史があり、1844人の卒業生(平成26年度末)を輩出している。昭和のベビーブーム時代を経て、少子化の現代に至るまでに、多くの定時制高校が廃止されてきたが、平成27年5月1日現在、群馬県内では1704名の定時制高校生がいる。本校においても、生徒数は減少の一途をたどっているが、現在32名の生徒が学ぶ。時代とともに定時制高校の環境も変化してきている。従来からの勤労学生に加え、多様な定時制高校生が在籍している。定時制高校には、様々な事情を抱えた生徒たちに、社会人としての必要最低限の常識と社会規範を身につけさせ、高校を卒業し社会に送り出す使命がある。生徒の主体性を引き出し、コミュニケーション力を養成しながら、生徒の自己肯定感や自己有用感を育み、明るく楽しく充実した学校生活を送れるよう、『ハートフル沼高定時制』をスローガンにした沼田高校定時制の取り組みを紹介する。



2 定時制高校生の現状

定時制課程の高校生は勤労学生である、というイメージがある。しかし、社会情勢の変化に伴い、定時制課程に入学してくる生徒は様々な事情を抱えている。次のような、生徒の類型があるように思う。

- ①従来からの家庭の経済状況に恵まれない生徒。
- ②中学校までの義務教育段階で、いじめや対人関係でつまずき不登校経験のある生徒。
- ③他の高校でつまずき、編入学してきた生徒。
- ④学習障がい(LD)、注意欠陥・多動性障がい(ADHD)などの発達障がいを抱えた生徒。
- ⑤日本語を十分話せない(外国籍を有する)生徒。
- ⑥生涯学習の観点からの、再学習を望む一般社会人。

これら類型が複合的に該当する生徒がほとんどである。⑥の生徒を除き、できることならば全日制高校への進学を希望しつつ、不本意ながらの定時制高校への進学者が多い。少子化の時代であり、高校学齢期の生徒が減少している。特に、利根沼田地区は、この減少率が大きく、全日制高校でも欠員が生じる状況にある。そのような状況にあって、定時制課程に進学してくる生徒には、次のような特徴が散見される。

- i 学力不足、学力不振であり、義務教育段階で、級友に揶揄されるなどして自分に自信が持てない生徒が多い。したがって、物事に積極的に取り組んだりすることができず、かえって関わることを避けるような面も感じられる。行動に積極性がなく、友人とのコミュニケーション力に欠け、協働的な姿勢に欠ける。
- ii 感情の起伏が大きく、自己内部にとどめることができず、粗雑な言動がみられる。
- iii 本人の状況を理解し援助支援をしている家庭もあるが、両親の離婚や複雑な家庭環

境を持つものも多く、家庭の教育力が乏しかったり、放任であったりする傾向が見られる。授業料等の滞納という経済面ばかりでなく、書類提出の遅れなどがある。

3 沼田高校定時制課程の歩み

かつて利根沼田地区には、定時制課程が沼田高校の他に、利根農林高校（現：利根実業高校。農閑期に勉学する昼間制、昭和51年3月廃止）、沼田女子高校（昭和59年3月廃止）にもあったが、現在は地域で唯一の定時制課程併設高校となっている。出生率の変化や高校進学率の上昇、全日制高校の拡充のなか、在籍者は昭和28年の315名をピークに漸減を続け、昭和30年代半ばまでは200名以上の在籍者がいた。第1次ベビーブームの昭和40年前後は定員減もあり、入試倍率が2倍前後となり、全日制を含め群馬県内高校一の倍率であった時代もある。昭和50年代に入ると、地域内の他の定時制課程の廃止（沼田女子高校定時制の廃止に伴い共学化）や第2次ベビーブームの到来で一時的な増加もあったが、平成4年を最後に在籍者が100名を割り込んだ。現在は三修制の導入（4学年在籍者無し）もあり、さらに減少の一途をたどり、30数名の在籍者である。

定時制課程に学ぶ生徒の減少は、時代の流れではあるが、利根沼田地区の特殊事情もある。まず、利根沼田地区は県内でも少子化の影響が最も大きい地域である。さらに、家庭の経済状況に加え、前橋や高崎地域から遠く、私立高校への通学が困難であり、かつては、全日制高校不合格となると定時制課程へ入学してきた状況もあった。したがって、優秀な人材も多く、大学へ進学する生徒も以前から珍しくなかった。卒業生には、市議会議員、消防本部消防長、道立高校の校長、ガラス工芸美術家、会社の社長等、各界で活躍されている方も多い。

在籍者数の減少とともに、生徒の様子も変わってきている。四方を山に囲まれ、高度経済成長期までは豊かな自然と人情に育まれた、純朴で誠実な勤労学生が大半であったようだ。昭和40年代後半から50年代にかけて、本校では卒業生率が50%近くまで下がった時期がある。それまでも潜在的にあった定時制高校への不本意入学者の問題、入試倍率の緩和から多様な学力を有する生徒の入学、学習未定着からくる怠学傾向・学校嫌い、さらにはそこに起因する生徒指導上の問題の増加がみられ、退学者が増加したようである。

この時期に本校では様々な校内の諸問題が検討され、現在の内規の基本ができたようである。単位不認定者をいかに減らし、中途退学者を減らすかの議論である。学習評価方法、出席状況の点数化、遅刻・早退の扱い、無断欠席・遅刻・早退の生徒への指導、交通安全規則等、現在に至っても活用しているルールの多くがこの時期（昭和56年頃）に定まった。本校定時制高校を取り巻く環境が大きく変化する時期に生徒指導の在り方が定まり、さらに多様な生徒が入学する現在においても、**生徒指導の体制が引き継がれ、いまや伝統**となっている。

たとえば、無断欠席を許さない体制の維持。保護者・生徒は必ず電話で連絡を寄越し、もし連絡がない場合は必ず担任から連絡をとっている。遅刻や早退時には、届けを必ず提出させる。最近では、茶髪やピアスをしている高校生も多く見受けるが、本校ではこれを許さない。生徒の生活環境に注意し、規則正しい正常な学校生活を送ることが、高校卒業の大前提と考えている。指導主事経験のある知人に、沼田高校に学校訪問に行き、定時制高校の認識が変わったといわれたことがある。また、授業公開では、来校された他の定時制課程の先生に「自然に生徒が教科書を開き、授業が始まることに驚きました」という感想をいただいた。他の定時制高校とは違う校風がある。

沼田高校定時制の特長は、**低い欠席率**である。昭和30年代から現在に至るまで、本校の欠席率は4～10%の間を推移している。低い欠席率が伝統となっている。県内公立全日制高校の欠席率平均は、近年2%弱であるが、多様な生徒を抱える定時制課程では、平

均が十数%になり、高い学校になると30%を越える学校もある。昨年度は4.0%で、県内定時制課程(14校17部)では一番低かった。本校の学校評価項目では、欠席率5%以下を目標としている。定時制課程としては、極めて高いハードルであるが、なんとか達成できるよう取り組んでいる(今年1学期段階での欠席率は3.5%)。

また、本校の生徒の**就業状況が比較的高い**ことも特長の1つである。定時制課程に学ぶ生徒は当然働いていると考える方も多いと思うが、実際には社会状況が変化し就業の実態も変化しており、働いていない生徒も半分近くいる。県内定時制高校の平均就業率は5割強であるが、本校では8割弱の生徒が仕事をしている(調査時の数字。現在はほとんどの生徒が働いている)。昼間働き、夜間学ぶ生活は大変であり、かつてのような昼間フルタイムで働く生徒は珍しくなった。大半が毎日数時間程度のアルバイトが中心である。本校では不登校経験のある生徒も多く、勉学への負担を考慮しながら、1日の生活のリズムを形成するとともに、仕事を通じたコミュニケーション能力の養成のため、就業を奨励している。

4 三修制の運営

本校では平成12年度より三修制を導入している。これにより、**3年間の修業で卒業できる**県内唯一の全日制に併設された定時制高校である。定時制課程では、毎日4時限の授業を実施し、週あたり20時間の授業を行っている。したがって、LHRを除き1学年あたり19単位の修得が可能である。高校卒業認定には74単位以上の単位修得が必要であり、一般の定時制高校は4年間の修学が必要となるが、本校では17時半からの通常授業に加え、県立前橋清陵高校通信制と連携し、通信制の授業を週2回(水曜と金曜日の16時半より)実施し、通信制授業を3年間で19単位修得することによって、高校卒業要件を満たす対応を行っている。

4年間で卒業するか、三修制を利用し3年間で卒業するかは、生徒の希望で対応するが、全日制高校と同じように3年間で卒業したいと、例年全員の生徒が三修制で学んでいる。通信制科目については授業運営は本校の教員が行い、単位の認定を清陵高校に依頼するシステムである。通信制課程では、学習指導要領により、教科毎に、添削指導の回数、面接指導の単位時間が定められているが、本校では、最も厳しい規定の教科の回数・時間にあわせて、通信制の教科すべての授業運営を行っている。国語は1単位時間あたりの面接指導

| | 本校 | 通信制 | 計 |
|----|----|-----|----|
| 1年 | 19 | 8 | 27 |
| 2年 | 19 | 8 | 27 |
| 3年 | 19 | 3 | 22 |
| 計 | 57 | 19 | 76 |

(スクーリング)は1回であるが、例えば、国語表現(4単位)では定期考査を含め32回の授業(面接指導に相当)を実施し欠課は4回まで認めている。通信制科目の定期考査では、合格点をとるまで何回でも追試験を実施している。また、添削指導は、指導要領通り12回の提出(原則2週間に1回)を義務づけ、遅延に対しても厳しく指導している。

厳しい内規を設定しているのは、しっかりと生活習慣の確立を促すためである。三修制を導入しても3年間で修得できる単位数は76単位である。高校卒業認定に必要な74単位に対して2単位しか余裕がない。**全履修科目に対し全修得を目指して指導**していかないと、卒業要件を満たすことができなくなる。職員も、義務教育段階で不登校経験がある生徒や、自立した学習習慣が確立されてきていない生徒も、必ず卒業させるんだとの緊張感を持って取り組んでいる。また、生徒にも通信科目は欠席できないとの意識を持たせている。「仕事で疲れ体調が悪いので、通信の授業は頑張ってくださいますが、その後は早退させてください。」といった光景もある。

レポートについては、隔週で提出があり、その督促、レポート内容の叱咤激励と、教員としては手間暇がかかる部分もあるが、生徒と教員が直接会話する機会である。生徒が学校への帰属感を高め、コミュニケーションづくりには効果的な場面を作っている。

5 求められる定時制課程教育

学習面での基礎学力の充実、生活面での社会規範の確立を目指し、常識ある社会人の育成に努め、高校卒業資格と就職により、安定的な経済力を持たせたい。『ハートフル沼高定時制』をスローガンにした沼田高校定時制の取り組みとして、次のような点に留意して、学校生活を送らせたいと考えている。

(1) 生徒が主役という意識を一主体的活動を引き出す

本校には、義務教育段階で不登校経験のある生徒が約1/3在学している。中には、小学校の低学年から、学校へほとんど通学していない生徒もいる。また、特別支援学級在籍者も約1/3いる。これら生徒は、学級活動を経験していないか、遠巻きにして見ていた傍観者的な存在であったようである。定時制課程は、かつての働きながら学ぶ生徒への配慮からか、伝統的に行事が多い傾向がある。積極性に乏しい生徒が多いため、長らく教員が企画した行事に単に参加するといった雰囲気があったが、これを改め、主体的に学校行事に関わらせるよう工夫を試みている。指示を出すだけで生徒に全てを任せるようなことはできないが、**多少の苦労を経験しながら成長する機会として行事運営を考える。**

例えば、「食の教室」という行事は、本校ではバーベキュー大会を実施しているが、かつては食材も用具も教員が用意し生徒は参加するだけだった。昨年からは実行委員会を組織し、内容の検討や準備作業を生徒に考えさせるようにしている。グループ毎に、バーベキュー以外のサイドメニュー（秋刀魚、チーズフォンデュ、焼きおにぎり、焼き鳥等）、食材の購入量・購入先を考えさせたり、用具を倉庫から出したりと、生徒が主体となるような指導を行っている。友人と意見が合わなく気分を害するようなこともあったが、準備等での大変さのある程度経験させることで、実施時の達成感を大きくさせることができたと思う。



前に触れた通信制の授業では、合格点を出すまで、何度も追試験を実施する。今年の1年生の数人は、何度追試をしても合格どころか得点が良くならなかった。8日目にして、教頭が注意した。「高校は単位を取らねば、進級・卒業はできない。今まで、追試験に合格できなかった先輩はいない。君たちにも力はあるはず。この土日しっかり勉強してきなさい。」翌週から合格者が始り、13日目に1人になった。14日目の試験で合格できなければレポートに代える予定だったが、生徒本人がもう1回受けさせて欲しいと言ってきた。なんと、15日目の追試にして全員が合格できた。職員室にいた教員全員で拍手し褒めた。本人は恥ずかしそうながら充実感のある表情だった。中学校時代、時間が来れば打ち切り。嵐が過ぎ去るのを待つみの生活だったのかもしれない。やればできることさえせず、成長の芽を自ら摘んできていたのかもしれない。少人数指導だから、**とことん、生徒と向き合う**ことができる。

学校生活の至るところで、生徒の良いところは、教員こぞって、やや大袈裟気味に褒めるように努めている。入学以前に様々な挫折を経験してきた生徒ばかりである。学校行事を通して、成功体験を積み重ね、自己肯定感、自己有用感を持てるような学校生活を送らせてやりたいと考えている。

(2) アットホームな学校づくり

本校は、校長、教頭、教諭9名(うち地公臨2名)の11名で32名の生徒を指導している。生徒3名に対し教師1名であり、生徒とのコミュニケーションづくりには非常に恵まれた環境にある。ただ、多くの定時制高校の教員構成は、五十代のベテランと二十代の新規採用教員に二分されることが多く、本校もそのような状況にある。年々、ベテラン教員の退職とともに、若手教員の割合が増えている。現在本校での新規採用教員は5名を数える。したがって、定時制高校においては、若手教員の育成という課題もある。ベテラン教員の経験と若手教員のエネルギーを融合し、生徒が充実した学校生活を送れるよう学校経営を考えていかねばならない。多様な生徒とのふれあいを通して、生徒の成長とともに教員自身の資質も高めていきたい。

定時制高校は、在籍者が少ない上に、学年によって生徒数にバラツキがある。今年度の2年生は6名しかいない。体育の球技の授業ではゲームもままならない。体育教師ばかりでなく、日常的に担任や若手教員が授業に参加している。

体育の授業ばかりでなく、他の授業でも、かねてから、教員が入れ替わり授業を覗きに行くという雰囲気がある。生徒の様子を確認したり、授業見学をしたり、時には飛び入り参加することもある。このような状況が、本校特有のアットホームな雰囲気を作っている。若く元気な教員が多いことが生徒の活気をさらに引き出している。

多くの定時制高校では、生徒の座る席は教室内で自由であるようであるが、本校では、伝統的に指定席である。欠席者や中途退学者の多い学校では、教室の中央部に空席ができたため仕方ないのかも知れないが、教室内の落ち着いた雰囲気作りには大切な要素であると思う。授業中は、言語活動の充実を図るため、できるだけ多くの生徒の発言の機会を作るようにしている。また、本校の多くの教員が何らかのICT機器を活用し、生徒の興味関心を促す授業を展開している。進学校とはひと味も二味も違う味付けであるが、生徒に「わかったー」、「できたー」感を持たせたい。新任教員も先輩に倣う形で授業に工夫を取り入れていく様子が見て取れる。



本校にも帰国子女(フィリピン人の母とのハーフ、中学校までフィリピン在住)がいる。まだ日本語がままならない入学当初の「古典」の授業では、古語を現代語に訳すばかりでなく、英語も飛び交う、ちょっと変わった風景も見られた。また、板書した漢字にカナをふるなどの配慮もしている。また、3年生には62歳の男子高校生(県内最高齢の高校生か)がいる。本校は大人しい生徒が多いが、中には“やんちゃな”生徒もいる。若手教員の2倍以上の年齢の生徒が教室内にいることは、生徒にも教員にも良い刺激になっている。

今年、2年生に編入学してきた26歳の女性(農業)がいる。沼田市内の中学で不登校になり高校進学先に本校も考えたが、知り合いのいない都市部の大規模定時制高校に進学。4年間で卒業できず通信制に転籍したが、あまり登校しないまま9年の歳月が経っていた。本校に入学した妹の送迎が日課になり、学校の様子を見聞きし、ここなら卒業できるかも知れないと本校に編入学してきた。当初は長いブランクがあり数学や英語で戸惑っていたが、今では同級生となった9歳年下の妹とともに、毎日部活動にも取り組んでいる。

(3) 部活動の奨励

定時制課程の部活動は、昼間仕事を抱えていることもあり、小規模校ではあまり活発ではない。本校は、昭和49年と54年に卓球部が全国定時制通信制高校大会で優勝(他に準優勝2度)、昭和56年には軟式野球部が準優勝した輝かしい歴史があるが、生徒数が

少なくなった近年は、大会前の1週間程、練習して試合に臨むといった状況であり、そもそも参加者が少なかった。

昨年から、若手教員が生徒を誘い継続的なバドミントン指導を始めたことから、次第に参加者が増加し**毎日の部活動が成立**している。一度火がつくと、生徒自身に「もっとうまくなりたい」、「強くなりたい」という気持ち生まれ、継続的な練習・努力の大切さを認識してきたように思う。まず、授業後の練習時間を午後10時半迄延長し、次に、定時制授業開始前や休日にも（全日制の体育授業や部活動の合間を縫い）練習し始めた。さらには、全日制や他校定時制と練習試合を行うまでになっている。不登校経験のある生徒は中学校時代に部活動の経験がほとんど無いのに、定時制の生徒は、全日制の生徒に対し精神的な壁があり、大変な進歩と思う。生徒十数人に、若手教員6人が指導にあたっている時もある。今まで初戦敗退が多かったが今年はベスト16に2人が入り、徐々に実力もつき始めている。



また、久々に軟式野球大会にも参加した。人数が少なく他校と合同での出場であったが、部活に取り組む環境・雰囲気作りに努めている。部活動が学校に通う楽しみの1つになれば、それはそれで好ましい。バドミントン部の火が、他の部活動に飛び火していくところまで至っていないが、級友の部活動の取り組みは刺激となろう。今年は、久しぶりに、柔道と卓球で全国大会の出場者が生まれた。



（４）学校の活性化へ向けた新しい試み

校門前の部活紹介看板(同窓会の支援)

定時制課程では、在籍数が少なく学校の活性化には工夫が必要である。本校には、体育的行事にクラスマッチがある。学年の在籍数・男女比から、クラス単位の対抗戦が厳しい状況も生まれている。そこで、昨年から、北毛地区にあるもう1つの定時制高校、渋川工業高校（在籍数28名）との体育交流戦を始めた。同じ定時制高校で学ぶ生徒同士のスポーツを通じた交流は、互いを切磋琢磨し刺激し合える好ましい機会であると考えた。渋工に持ちかけると快く応じてくれた。今年は渋工を会場にし、生徒は学校自動車で移動した（生徒数が少ないため可能）。女子がほとんどいない工業科の渋工と、4割が女子の沼高を配慮して、2度目となる今年は、綱引き、リレーを、長縄、ムカデ競争に変更した。他に、卓球、バドミントン、ソフトバレーに汗を流した。



白熱した試合では、コートの上に沼高生が集まって応援する光景が見られた。競技で頑張る。そして応援でも頑張り、一体感のある対抗戦となった。初勝利が決まると、生徒間に笑顔と拍手が生まれ、握手をし合っていた。学校対抗という形が、生徒の学校への帰属意識を高める意味でもいいものだと感じた。沼田高校では、全日制課程が渋川高校と定期戦を行っているが、今後この行事が「夜の定期戦」として定着して欲しいと考えている。



定時制課程では、生徒数の減少に伴い多くの学校が修学旅行を行っていない。実施している学校も生徒数が少なく、3、4年生合同で隔年実施している学校が多いようだ。旅費の工面に難渋する家庭もある上に本校には4年生が在籍していないため、かなり以前から実施していない。代わりに、2、3年生合同の「バスハイク」を実施している。学校生活がより楽しく充実したものになり、高校生活の思い出になるよう、今年は、方面や内容を工夫し、全学年での実施（全学年でもバス1台で可能）を検討している。お金をかけず、生徒の企画委員会を組織し、生徒の事前学習や校内文化発表会で事後報告会を実施することによって、内容の充実したものにしたいと考えている。

また、夏季休業中には「尾瀬ハイク」も企画した。生徒と教員が通常とは違った形で、ともに汗をぬぐいながら地元の山歩きを楽しみ、交流を深めることは良い思い出にもなるだろうと思ったが、残念ながら天候が悪く実施できなかった。

資格の取得に向けた取り組みも始めている。実業系とは違い普通科では資格取得が難しい。生徒の自信につながり、普通科でも取得可能な資格はないか検討した結果、ワープロ検定を奨励している。『情報』の授業を3年生から1年生に移し、ワープロ検定を受検しやすい教育課程に編成し直した。昨年は初年度の試みながら、高い合格率を得た。



（5）家庭や地域との連携

生徒が充実した学校生活を送り高校を卒業できるためには、生活指導が根幹である。あいさつ指導、欠席時の連絡の徹底、服装や頭髪の乱れは許さないの3点が柱である。日頃から生徒本人とコミュニケーションをとり、学校での指導を図っている。また、そればかりではなく、家庭との連絡を密にし、保護者が学校の応援者であるよう心がけてもいる。家庭によっては、連絡を取ろうにも電話が使用不可であったり、難しい対応を迫られるようなケースもあり、定時制ならではの苦労もある。家庭との信頼関係の構築により、家庭の教育力を促し、怠学傾向・不健全な交友関係の防止を図らざるを得ない。“面倒見のよい良い学校”といわれることを善しとして、家庭との連絡を密に図っている。

生徒の登校は、夕方から夜に及ぶ。冬場は、降雪もある地域であり、通学は保護者の送迎に頼る生徒が多い。部活動に取り組む生徒が家路につくのは、夜10時40分頃である。毎日の送迎は大変である。家庭の協力支援のうえに成り立っている。学校は、家庭から協力理解を得られるよう、生徒の活躍や授業の様子等を連絡広報していく必要がある。



冬期、夜の駐車場の風景

不登校経験者の対応は、高校入学という大きな環境の変化のタイミングで解消できるかどうか勝負である。本年度入学者16名のうち、6名が不登校経験者であった。残念ながら1名は、毎日のように家庭との連絡を取り改善に努めたが、不登校経験があるだけに一度欠席が始まると登校への改善は厳しく、休学に入ってしまった。ただ、彼以外の生徒はほとんど欠席がない。本校入学後の不登校の改善の割合は非常に高いと思う。夕方からの登校、制服もなく比較的圧迫感がない学校生活、少人数教育の実態が、生徒の再生を促していると思う。昨年、中学校と連絡を取り合い、中学3年生とその保護者の学校見学を推進している。全日制高校と大きく環境が変わることに大なり小なりの抵抗感があり、

抵抗感を払拭してほしいためである。予想外にしっかりと授業をされていると好感を持っていただく方が多いようだ。今年度入学生の半分以上は、事前見学をしてもらっている。不登校生徒には、「中学校は、学校へ行かなくても卒業できるかもしれないが、高校はまず出席しないと、進級・卒業はできないんだよ。」と、登校の大切さを伝える。級友の高校進学の様子の中、不登校であっても高校へ行きたいと感じていることは伝わってきた。中学校の先生からは、「見学以来、中学校に登校するようになりました。」といった話も聞く。こちらとしては、入学後の不登校の改善を意図しているが、登校刺激の1つの手段にもなっているようだ。

従来からの保護者向けの**授業公開**に加え、入学生を送っていただく利根沼田地区の中学校17校、県内の他の定時制高校にも、今年初めて案内を出した。予想以上に来校者があり、生徒、教員ともに刺激となった。中学校の先生からは、「あの子が、ちゃんと授業を受けていてホッとしました」といった感想もいただいた。教員にとっては、定時制高校を2校以上勤務することはほとんど無く、他校の様子をあまり知らないことが多い。様々な御意見をいただき参考となった。本校では、昨年度から他の**定時制高校への学校訪問**も行っているが、定時制高校の学校運営、授業の充実に向け、継続していきたい。



(6) 広報活動

本校では、家庭への連絡に次の3つを定期的に発行している。

- ① 『5：30新聞』 定時制課程の学校新聞、年2回（10月、3月）発行
- ② 『5：30新聞ミニ』 定時制課程の学校通信、毎月発行
- ③ 『船出 mini』 定時制課程の進路通信、毎月発行

『5：30新聞』は、ゴジハン新聞と読む。定時制課程の授業開始時刻、5時30分から名付けられている。今年3月の発刊が85号であり、40年以上の歴史がある。以前は業者印刷であったが、6年前からカラースプリンターでの印刷に切り替えた。生徒数の減少から発行部数と費用を勘案した結果だが、パソコン技能を有する職員の努力もあって、読み応えがあり、何よりも手作り感がでて温かみのある新聞となっている。A4版12ページでの構成で、分量も多い。学校行事、生徒の活動、部活動の紹介を主な記事としているが、10月号には、新入生の入学後の感想、生徒の職場訪問、3月号には、卒業生の言葉を掲載している。今年3月には18名の卒業生を送り出したが、異口同音に『**沼高定時制で良かった**』と、記してくれていたことに感激した。



この月刊版が『5：30新聞ミニ』である。今年7月に100号の発刊を迎えた。8年以上、5代にわたる教頭で編集しつないできたことになる。現在は、A4版両面カラー印刷。こちらも、学校行事、生徒の活躍の紹介や来月の行事予定等であるが、学校評価アンケート結果の家庭連絡なども行っている。多く

の生徒の活躍を紹介し褒めてあげるよう心がけている。

『船出 mini』は、月刊の進路通信である。3つの中では最も歴史が浅く、今年7月に第21号を発行した。後述する定時制課程での進路指導の大切さを痛感し生まれた。A4版両面カラー印刷。進路を考えるために、生徒に向けたメッセージが主である。最近の話題を列記すると、各界でプロといわれる職業人の仕事ぶりや考え方の紹介、卒業生の職業（地上150mでの高所作業）紹介、就職試験に向けた心構え、知っておくべき知識（完全週休2日制と週休2日制



の違い)、採用する側からの人材の評価点、面接の注意点等、多岐にわたる。内容が非常に充実しており、生徒への進路意識の高揚、刺激の一助となっている。

これら配布物が、生徒にとっては自己有用感を高め、次への活力を生むことを期待している。保護者にあっては、生徒の活躍や学校の様子を知り、学校への理解や支援を深めてもらえることと思う。また、昨年より、地域の**中学校訪問**を始めた。定時制高校の実情・実態が十分理解されているとはいえない。本校が三修制により、3年間で卒業できることも十分には知られていない。『5：30新聞』や『5：30新聞ミニ』を見て頂くことが、定時制高校の様子の理解には一番いいようだ。

6 定時制高校であるがゆえの進路指導

創生期の定時制高校は、働く人が学ぶための学校であり、就職指導はあまり必要とされなかったであろう。また、定時制高校を取り巻く環境変化にあって、『数年くらい前は、定時制に進路指導といえる程のものはなかった。とにかく、卒業させることで精一杯だった』という話をベテラン教員から聞く。また、進路指導まで手が回らないといった他の定時制高校の様子も聞く。現代の定時制高校は、多様な生徒が通う。経済的に苦しい生徒は、入学時からアルバイトをすることも考えて入学してくる。一方、不登校等の経験を持つ生徒は、まず学校生活に慣れること、その上で、1日の生活リズムを保つための手段としてアルバイトをするという傾向がある。定時制在学中は、学業優先の意識のもと、仕事の厳しさ、時間の自由度、責任の度合い、報酬に加え、社会性の不足や周囲とのコミュニケーションを取ることを苦手としている等の問題が加わり、軽いアルバイトを求めている傾向がある。卒業後も同じ仕事を継続する生徒はほとんどいない。多くの生徒がアルバイトをしているからといって、雇用について十分理解しているかというところでもない。

定時制課程に学ぶ生徒は、多かれ少なかれ家庭の経済問題を抱えている。彼らも、いずれは家庭を持ち、親となる。高校卒業の資格をもたせ、生活基盤を固められるよう、卒業後の進路に対して指導をしていきたいと思っている。負のスパイラルから脱却させたいと思うからこそ、**進路指導がより一層大事**であると思う。このような思いで担当者の努力もあり、『船出 mini』が創刊され、継続している。

社会人講演会、卒業生との懇談会、進路説明会等を企画し、インターンシップ、企業見学、オープンキャンパスへの参加を促している。1、2年生の面接でも卒業後の進路を話題にするようにしている。生徒の進路意識を向上させ、**早い段階で就職・進学活動**に取り組めるよう努めている。3年生には、夜遅くまで面接試験に向けた指導を行っている。

例年、本校の生徒の過半数は就職希望である。今年4月、久々に大学進学者が2名生まれた。専修学校への進学者5名の他は就職であった。最後まで就職に苦勞した生徒は、発達障がいを持つ生徒である。コミュニケーション能力は接客業には必要不可欠であり、技

術者としての資格取得も普通科の本校では難しい。「まじめで、心配りができ、指示されたことはしっかりやる子です」とアピールしながら、担任、進路担当教諭が、求人先に地道にお願いしている。景気の動向に左右されるが、今年は上向いていることに期待したい。

7 定時制高校の使命と今後の課題

少子化の時代、高校には学校再編の問題がある。定時制課程においても、3年連続10名以上の入学者がいない場合廃止との県教育委員会方針がある。いま、周辺部の定時制高校は生き残りをかけた取り組みを模索している。定時制高校への需要・必要性はあると考えている。義務教育段階の不登校生徒は減少する気配はない。学校教育で、様々な挫折をしてきた生徒の受け入れ先としての使命はなくなる。昨年、利根沼田地域の中学校を訪問し、定時制課程への入学をお願いして回ったが、前年度の約3倍の入学者が生まれた。広報活動の重要性を再認識した。

本校は現在、比較的平穏で落ち着いた学校の雰囲気を保っている。とはいえ、平穏な学校の状態が保証されているわけではない。毎年、1年生や他の高校から編入して来た生徒が学校に馴染み、落ち着いてくるまでは大きな緊張感がある。年度によっても傾向が異なるが、入学当初は、廊下等で声をかけても返事がなく、他者とのコミュニケーションを取りたがらないような生徒が多い。学校生活のルールがわかっているのかと問いたくなるような生徒もいる。少人数指導の中、学校が自分たち生徒の面倒をみってくれるとわかると、一転、極端に甘えてくる生徒もいる。他者との距離の取り方（生徒と教師間、生徒間）が、わかっていないなあと感じる生徒がいる。

社会人としての必要最低限の常識と社会規範を身につけさせ、高校卒業という学歴を持たせて社会に送り出すことが、定時制高校が社会のセーフティーネットとしての役割を担っているといわれるところである。しっかりと生活指導の上に、授業の充実や学校行事・部活動の活性化を図り、卒業後の生活基盤の確立をめざした進路指導を展開したい。不登校や特別支援学級在籍等の経験を持つ生徒が多い、また、自律的な生活習慣、学習習慣が確立されていない生徒が多い、定時制課程にあっては、**少人数指導の中で、心のふれあいを大切に**した指導が大切であると日々感じている。**生徒に主体性を持たせ、少しずつ様々な経験を積みながら自己有用感や肯定感を持たせていくことが重要である**と思う。彼らにこそ、教育の必要性や重要性があると強く再認識するとともに、我々も定時制高校に勤務する責任感や使命感を痛感せざるを得ない。

現在の周辺部の定時制高校は、在籍数が少ないことによる経済論理での非効率な学校運営ばかりでなく、そもそも学校行事等で支障をきたす問題もある。しかしながら、定時制高校の認識を深めてもらえれば、どの地域でも潜在的な志願者がもう少しいるのではないだろうか。生徒本人の適性をふまえ、本人の成長を促すような学校であることを広報していかねばならない。**明るく、温かみのある学校、面倒見のよい学校**であることを訴え、また、そのような実態のある学校にしていく努力を続けていきたい。

参考文献：沼高百年史（上・下）

- ：平成26年度群馬県高等学校定時制通信制要覧（群馬県教育委員会）
- ：平成27年度群馬県高等学校定時制通信制要覧（群馬県教育委員会）
- ：平成26・27年度 群馬県高等学校管理経営研究会副校長教頭部会
定通制部会 研究集録

（文：定時制課程教頭 岩田 悦夫、 写真：教諭 見城 昌平）